

「どこから来て、どこへ行くのか」

——ジョン・ウエスレー（一七〇三—九一）の場合——」（Ⅰ）

佐々木 勝彦

はじめに

二〇一七年は、ルターがいわゆる「九五箇条の提題」（『贖宥の効力を明らかにするための討論』）を発表し、宗教改革の口火を切ってから丁度五〇〇年目にあたります。特に福音主義の教会や学校にとって、これは、自らのルーツについて改めて考えるよい機会です。本稿は、小さな教室でこの「宗教改革について物語る」ための準備を重ねるなかで生まれものです。

しかしでは、なぜジョン・ウエスレーなのか？ と問われるならば、とりあえずこう答えておきましょう。彼の生きた時代は、わたしたちの時代と同様に、社会環境がめまぐるしく変化し、貧富の格差が大きく広がった産業革命期だったから、と。ルターによる宗教改革が起こってから、すでに二百年以上の時が経過して

いました。したがってウエスレーについて物語ることは、「宗教改革とその後の歴史」について語ることでもあります。

ウエスレーは、一七三五年、まだ植民地であったジョージアに伝道旅行に出かけています。たしかにその成果は大きくありませんでしたが、その播かれた種は、予想もしなかった仕方で芽を吹き、やがてアメリカの地に根づいて行きます。一七六〇年代にはアイルランドから、さらに七〇年代には英国から多くのメソジストが移住し、一七七三年七月一四—一六日には、フィラデルフィアにおいてメソジスト第一回年会が開かれました。ところがそれは、ちょうどアメリカが独立戦争に踏み切ろうとしていた時期であり、一七七六年七月四日には、大陸会議において独立宣言が採択されています。その当時、メソジストはまだ英国国教会の礼典に与ることを前提にしていたため、戦争による国教会の司祭の帰

国はアメリカのメソジストにとって極めて深刻な問題でした。ウエスレーは、英国とアメリカの双方においてメソジストが生きてのびるための様々な方策を打ち出しました。宗教改革の波がヨーロッパ大陸から英国へと伝わり、さらにそれがアメリカに届く歴史は、日本の福音主義教会と学校にとっても、自らのルーツを再確認するうえで、是非とも知らなければならぬ歴史です。

ウエスレーは若い時から社会活動に関心を寄せ、極貧のゆえに医療も教育も受けられなかった大衆の状況を冷静に分析しつつ、常に新たな改善策を追求しました。彼は、与えられた豊かな能力と機会を一刻も無駄にすることなく、生涯を伝道に捧げています。四百冊に及ぶ出版活動、貧困者支援、医療支援、そして巡回説教（ウェールズ、アイルランド、スコットランド）など、その足跡を知られば知るほど、彼の判断力、行動力、そして統率力に圧倒されます。

小さな教室での経験によると、現代の学生の目にもウエスレーの実践的な判断力と行動力は大変魅力的なものに映るらしく、彼のリーダーシップに関する課題レポートにも、積極的な反応がみられます。ところが、彼を動かした内面的根本モチーフについての議論になると、まるで別人のように反応します。その原因のひとつは、日本語による適切な教材が少ないことにあります。たしかにこの問題を簡単に解決する方法はありませんが、彼の超人的

な業績に目を奪われて、彼の真の思いを見逃してはなりません。そこで今回は、これらの諸活動を前提としつつ、あえて彼の行動力を支えている「心」に焦点を合わせ、その「深層モチーフ」に迫りたいと思います。

もちろん彼にも弱点(?)はあります。例えば、彼の結婚生活は明らかに失敗でした。女性問題は苦手だったようです。母親とのきずなが深すぎたのでしょうか。弟チャールズ・ウエスレーとの意見の違いも大きかったと伝えられています。しかし実際はどうだったのでしょうか。彼は、最後まで英国国教会の聖職者であろうとし、それから分離・独立しようとする意見には批判的でした。また、政治的には保守的な立場をとり、直接、社会構造を改革するという道は選びませんでした。これらの事実はどのように理解したらよいのでしょうか。

今回は、「I 「読む」関連年譜」と「II 背景としてのピューリタニズム」において、一冊の名著を紹介するという仕方です。ピューリタニズムの歴史をたどり、次に「III ウエスレーの神学」において、これからのウエスレー研究において必ず言及されるべき数冊の書物を取り上げたいと思います。その名著とは大木英夫著『ピューリタン』であり、もう数冊の書物とは清水光雄氏の諸々の著作です。

「I」の「読む」関連年譜」には、通常の年表や略年表と異なる

り、各事項の間に、メモ風に「解釈」や「引用」がふんだんに挿入されています。聖書科・宗教科の教師のための補助教材を提供するという本稿の密かな狙いからすれば、このような方法も許されるのではないかと考えています。

では早速、「I 「読む」関連年譜」にチャレンジしてみましよう。かなりハードな旅路になるかと思いますが、時間をかけてゆっくり読んでみてください。きっと、新しい発見があるはずですよ。なお、人名および地名等の表記は、引用する際にも、読みやすくするために統一してあり、必ずしも原文通りではありません。漢字および句読点の使い方についても、同様の修正が加えられています。

I 「読む」関連年譜

年代	関連事項と解説
一四八三	ルター、アイスレーベンに生まれる。
一五〇九	カルヴァン誕生。 ヘンリ八世即位(位一五〇九―一四七)。ローマ教皇より「信仰の擁護者」の称号を与えられる。
一五一七	一〇月三十一日、ルター、「贖宥の効力を明らかにするための討論」の九五箇条の提題を送付。城教会の扉にも掲示？

一五二二

一月三日、ルター、破門される。

「ルターの主張は、一般に「信仰のみ・恵みのみ」と「聖書のみ」というキーワードで要約され、この二つは「宗教改革の二大原理」と呼ばれることがある。その場合、前者は「内容原理」、後者は「形式原理」とも呼ばれる。」

一五三四

ヘンリ八世は、教皇の反対を押し切って妃キャサリンと離婚し、アン・ブーリンと結婚。

「王は、『国王至上法(国王が教会の最高首長)』、『宗教改革著作集15』教文館、を参照」によりローマ教皇庁と断絶する道を選び、その結果、英国国教会が成立。国王は英国国教会の首長となり、ケンブリッジ大学教授トマス・克蘭マーをカンタベリ大主教に任命。その後、広大な領地を所有する修道院を解散し、財産を没収して王室の財政基盤の強化をはかる。英国国教会の誕生により、政治的には、ローマ教皇庁の後ろ盾となっていたスペインとの対立が深まる。」

一五三六

「教職(大主教、主教、司祭、執事)の任命権が国王にある点と前と変わっておらず、この点でカトリック教会の教皇のもつ任命権と等しいものをイギリスでは国王がもっている」(野呂芳男著『ウェスレー』清水書院、四三頁)。
カルヴァン、『キリスト教綱要』を出版。

「彼を一躍プロテスタントの指導者にするこの書で、彼はフランスのプロテスタントを弁護すると共に、国家権力からの教会の信仰上の独立を要求した。これは、「神の主権」や「摂理」の信仰により生の全領域を神の意志に服従せしめようとするもので、ルターの二統治説は克服された。彼「カルヴァン」の教理に基づいて行われた厳格な「神政政治」により、ジュネーヴの町は「聖徒の町」と化した、と伝えられてきたが、今日では、改革はそれほどまでは徹底しなかったことが明らかになっている。しかし、ジュネーヴがカルヴィニズム運動の中心地となったことは確かである。ピューリタニズムはカルヴィニズムの流れに属している」(大木英夫著『ピューリタン』聖学院大学出

版会、五三頁以下)。

「ピューリタニズムはたしかに最初の段階では、インターナショナル・カルヴィニズムの一環という性格の運動であった。……ピューリタニズムの性格は、ハインターナショナルである。それは、アングリカニズムのようなハナシヨナルな宗教に衝突すると、外来宗教・外来思想として反発されるのである。それは英国に土着できない。それゆえそれは知的な人間の頭の中に仮寓を求める。ピューリタンの宗教は、少なくとも初期の段階では、インテリの宗教、大学人の宗教であった」(同、六一頁以下)。

一五四五 トリエント公会議(一五四五―五六三)。

一五四六 ルター、アイスレーベンで死去。

一五四八 エドワード六世即位(位一五四八―一五三三)。

一五四九 第一次「礼拝統一法」[「宗教改革著作集15」を参照。第一次「祈祷書」(克蘭マーによる序文)。

一五五三 離婚されたキャサリンの娘メアリー一世即位(一五五三―一五八五)。

「女王は、ヘンリ八世がローマに対抗するために主張した「国王の至上権」を逆用して、英国国教会をカトリックに転覆させ、反カトリック勢力を弾圧。二八六名を火刑に処する。」

一五五八 アン・ブリーンの娘エリザベス一世即位(位一五五八―一六〇三)。

「エリザベスは国王至上法を復活させ、統一法によって、共通祈祷書の使用を義務づけた。女王は英国を再びアングリカニズムに戻し、それによって教会と国家を再建しようとした。」

「エリザベスのピューリタン対策は巧妙であった。政治的反抗を企てないかぎり、彼らを弾圧することはなく、寛容の対象とした。つまり、彼らが狭い意味での宗教運動に自己を限定するかぎり、彼らを受け入れた。したがってピューリタンは、国内に留まるかぎり、アングリカニズムのもとで生きなければならず、常に外面的服従(「コンフォーム」)と内面的不服従(「ノンコンフォーム」)の緊張関係のなかで生きること強いられた。ピューリタン運動はやがて非政治的説教運動へと転向して行く

が、アングリカン体制との矛盾は解消されず、ピューリタンに残された道は、① 政治的地下運動、② 国外脱出(一六二〇年、メイフラワー号のピルグリム・ファーザーズ、一六三〇年、ジョン・コットンらの大移住)、③ 革命(ピューリタン革命)の三つであった。そして①の、地下に「クラシス運動」は、一五九三年の「長老会」をつくろうとした「クラシス運動」は、一五九三年の「反ピューリタン勅令」によって息の根を止められピューリタンの運動はますます説教運動の形態(「教会の改革」から「人生の改革(回心)」へ)をとらざるをえなくなつた。」

「アングリカンにとっては、ローマの支配が打破され、その支配が入る前のアングロ・サクソン時代の純粋な英国国教会が回復されれば、宗教改革は終るわけである。それ以上に進む必要はない。しかしピューリタンはこの見方を受け入れない。だからエリザベスの宗教体制は過渡的であり、真の宗教改革に向かつて前進しなければならぬと主張するのである」(同、六四頁)。

「アングリカニズムというのは、カトリシズムの普遍主義に対して、ナシヨナリズムの立場である。……英国の土着性と結びついた宗教である」(同、五八頁)。

「英国宗教改革は、ハコルプス・クリスチアヌムをナシヨナルな規模において保持する体制をつくり出したことになる」(同、五九頁)。

「英国宗教改革において、ナシヨナリズムは国王絶対主義と必然的に結びついた。なぜならヘンリ八世は自ら英国国教会の「最高の頭」「かしら」となったからである。中世世界において教会の「最高の頭」と言えば、それは教皇を指していた。……そこにおのずと王の神化がおこり、中世の教皇が帯びていた性格を王に帰するようになる。そして人民の、宗教的に内面から促された服従の対象となるのである。これが、その時代、一般人民に要求された「受動的服従の倫理(絶対的国王に対するあらゆる抵抗を罪として否認した倫理思想)」なのである」(同、五九―六〇頁)。

<p>「アングリカニズムは三本柱をもっていた。ナシヨナリズム、ア ブソリューティズム（国王絶対主義）、受動的服従の倫理であ る」（同）。</p>	<p>書が規定していない事柄）として扱ひ、中世の宇宙存在論的世 界観をもって解釈した。これに対しピューリタンの世界観は歴 史的な世界観であった。」</p>
<p>「ピューリタンはカルヴァンの流れだが、それをもっと徹底させ ている。聖書《のみ》という主張は、中世カトリシズムにおけ るヘブライズムとヘレニズムの総合を、ヘブライズムの立場に 立って分解することを含著している」（同、六二頁以下）。</p>	<p>「その後のカトリイトの生涯をたどると、七二年にフェロー（特 別研究員）職も剥奪される。↓ジュネーヴへ逃亡し、カルヴァ ンの後継者テオドール・ベザの許に留まる。↓八五年まで逃 亡生活を続ける。↓帰国後、一五九〇・九二年の間、逮捕・監 禁され、やがて釈放されたが、ハンプトン・コート会谈の直前 に死亡。」</p>
<p>「ピューリタニズムはハ外来思想であった」（同、六八頁）。</p> <p>「イングランドの教会の三十九箇条」「宗教改革著作集14」を参 照。</p>	<p>「ピューリタンというのは思想にとらえられた人間なのである。 ……ピューリタンの生の本質はハエミグレと称することがで きる。エミグレ、それはあのメアリ女王の反動宗教改革の迫害 （一五五三・五八年）を逃れたプロテスタントが、ジュネーヴや その他ライナント（ドイツ西部）の諸都市に亡命したときに 呼ばれた呼称である。それは「亡命者」「移住者」を意味する。 このエミグレたちは、エリザベスの即位と共に帰国した。そし て彼らもたらしたジュネーヴの宗教改革の報道が、カトリラ イトのような若い神学者たちをピューリタン運動へとかり立て ていったのである。ピューリタン運動はエミグレによって開始 された、と言うこともできる」（同、五一頁）。</p>
<p>カルヴァン死亡。</p> <p>「トリニティ・カレッジのフェロー、トマス・カートライト （一五三五一六〇三）は、ケンブリッジに行啓していたエリザ ベス（一五三三・一六〇三）の前で行われた模範哲学討論におい て、王制を批判。彼は、「聖書のみ」の原則を社会全体の改革 にまで適用した。」</p>	<p>「三九箇条」修正、法制化される。</p> <p>スペインの無敵艦隊を破り、海外進出の端緒を開く。</p> <p>一五九〇年代 リチャード・フッカーが、カルヴィニズムによら ないアングリカン神学を構想。</p>
<p>「トリニティ・カレッジ」「ヘンリ八世によって設立されたケンブ リッジ最大のカレッジ」はピューリタン運動の発祥の地」 （『ピューリタン』四五頁）。</p> <p>シエクスピア誕生（一六一六）。</p>	<p>『ピューリタン弾圧法』、『ローマ・カトリック教徒弾圧法』、『宗 教改革著作集15』を参照。</p> <p>「この反ピューリタン勅令により、「クラシス運動」は息の根を止 められ、ピューリタンの主流はますます説教運動へと傾いて いった。」</p>
<p>エリザベス、カンタベリ大主教パーカーに書簡を送り、アングリ カニズムによる国民的礼拝様式の統一の強化に乗り出す。</p> <p>ジョン・ホイットギフト（一五三〇頃・一六〇四）、トリニティ・ カレッジの学長に就任。</p>	<p>一五七一</p> <p>一五八八</p> <p>一五九三</p>
<p>「ホイットギフトはT・カートライトの長老主義を批判。その後、 ウースター主教を経てカンタベリ大主教となる。神学的にはカ ルヴァン主義を奉じたが、高等宗務官裁判所を通して英国教会 の統一のための政策を強力に進めた。教会制度については、彼 は「聖書のみ」の原則を当てはめず、これを「無規定の事柄」（聖</p>	<p>一五九三</p>

「どこから来て、どこへ行くのか——ジョン・ウエスレー（一七〇三・九一）の場合——」（I）

「パーキンスはカートライトよりはるかにはっきりしたコンフォミストで、英国国教会内部で活動できる人であった。パーキンスの関心は、「教会」の改革ではなく、「人生」の改革だった。彼自身、ピューリタニズムをへ回心▽の体験をとおして把握した人である。……パーキンスはケンブリッジ大学の教授だったが、彼の宗教は一般大衆の状況にぴったりとするものをもっていた。このような説教運動において、最初、大学人の運動だったピューリタニズムが、一般大衆のなかに浸透し、民衆の運動となりだすのである。この転向はピューリタン運動の強靱な永続力を生みだし、王政復古（一六六〇年）以後も優に生き続けるものとなした」（同、七四頁）。

一六〇四

一五九八

ジェームズ六世、「自由王制の眞の法あるいは自由なる王とその自然的臣民との間の相互互恵的義務」を出版。

「この政治論文によると、王は、欲することは何ごともなしうる存在であり、王の自由な行為に反抗することは不自然な行為である。国王は「自然的父」であり、臣民は「自然の子」のような存在である。したがって国王は法律の著者であり、その作者であるということになる。」

一六〇三

ジェームズ一世即位。

「エリザベス一世の死後、彼女の叔母（ヘンリ八世の妹）マールゲレットが嫁していたスコットランドのステュアート王家から、後継者が来ることになった。それがジェームズ六世である。彼は英国に来て、ジェームズ一世（位一六〇三―二五）として即位。ここにステュアート朝が始まる（一六〇三―一七一四）」。

四月、ジェームズは王冠を受けるために、南へと出発し、その途中で「千人誓願」と呼ばれる誓願書を受け取る。

「千人誓願」は、ピューリタンが最初から問題にしていた、祭帽、サープリス、結婚指輪、教会音楽などについて、その問題を解決するための会議の開催を要請するものであった。国王はこの請願を受け入れ、次の年、ハンプトン・コート（宮）で会議が開かれることになった。しかも国王は、最初、この会議におい

て、大主教・主教らのアングリカンの代表とピューリタンの代表が対等に論ずることを許可した。しかしその後、アングリカンの巻き返しにあり、王は、エリザベス一世の治世にならって、ピューリタンの主張を軽くあしらひ、最終的に「主教なければ、国王なし」と宣言した。それはステュアート王朝とアングリカニズムの結合の宣言であり、ピューリタンの夢——北王国スコットランドのケースにならって、ステュアート王家とプレスビテリアニズムを結合すること——は打ち砕かれた。」

一〇月、バンクロフト（一五四四―一六一〇）、ホイットギフトの後継者としてカンタベリ大主教に任命される。

「バンクロフトは、ピューリタンのみならずスコットランドのプレスビテリアンまで徹底的に批判したため、彼と結びついたステュアート家はスコットランドから浮き上がっていった。さらにバンクロフトの強硬策（「百四十一条教会法規」）の失敗により、王はイングランドからも浮き上がってしまった。つまり議会は、古い『聖職者服従令』を根拠として、カンタベリ大主教の教会法規でさえ英国の法伝統に反することはできず、コモンロー（普通法）によって守られている英国人としての権利を侵害することは許されないとした。具体的には、バンクロフトの影響下にある「高等宗務裁判所」に引き出され、教会法違反者として弾圧された者たちが、伝統あるコモン・ロー法廷である『民事訴訟裁判所』に保護を求めた際に、民事訴訟裁判所は「管轄禁止令状」を発して、その裁判の継続を阻止した。したがってバンクロフトは、教会法を強要し、統一をはかろうとすればするほど、ピューリタンだけでなく、その背後にいるコモン・ロイヤルも敵とするという状況に追い込まれていった。」

「ピューリタンは、ハンプトン・コート会谈に失敗して、かえって思わざる可能性が眼前に開かれたのである。一方で説教運動を通して人民との結びつきを深めつつ、他方では議云、コモン・ローといった英国の重要な制度や伝統との結びつきが可能となった。この変動で、英国社会におけるピューリタン運動は、

それまででない有利な地点に立つことになるのである」(同、九四頁)。

「エリザベス時代のピューリタンの思想は純粋な聖書主義であった。ところがコモン・ローヤーとの結合を契機として、ピューリタンの歴史的世界観の中に、英国的法意識や英国史の見方が導入されてくるのである。その英国史の見方は、……だいたい次のようなものである。一〇六六年のノルマン征服以前には、英国にはアングロ・サクソン住民が、代議制度を通じて自らを統治する、自由にして平等な市民として生活していた。ノルマン・コンクエスト(ノルマン征服)は彼らからこの自由を奪い、外国から来た王たちは専制政治をした。しかし人民は、失われた権利を取り戻すために戦った。それはマグナ・カルタのような勝利を得た。このような戦いがずっと続けられている。以上のような歴史観が、聖書の歴史観の中にはめ込まれてくる。

そしてノルマン・コンクエスト以前の時代は、聖書の墮罪以前のバラダイスの時代と微妙に同一化されてくるのである。この結合によってピューリタンの聖書的な歴史的世界観は、英国社会の実質にかみ合ってくる。この結合の中から一六四〇年代の革命思想が生み出されてくるのである。これはユニークな思想の土着である。それは単なるナショナルなものとの妥協ではない。ナショナルなものを媒介とし、革命を起こすような仕方での英国社会とのかみ合いなのである」(同、九五頁)。

一六〇八

スクールビ村の非合法的集会の信者の集まり(コングリゲーション)がオランダへの脱出を敢行。

「彼らは、ハンプトン・コート会谈後の弾圧で追放された者を指導者として受け入れていた。彼らは、オランダへ脱出した後、一年間、アムステルダムに住み、さらにライデンに移住して、織物工、大工、石工、鍛冶工などの手工業に従事した。」

「スクールビ村のコングリゲーションの存在は、すでに一五八〇年代に「分離主義」とか「ブラウニズム」と呼ばれ、「プレスビテリアン国民教会」を目指すピューリタンの主流から排除さ

れてきた流れが生き続けてきたことを示唆している。彼らはず

でに地理的教会(パリッシュ)から自覚的に離れ、自覚的信仰をもつ者による教会形成を実践していた。彼らは、「改革された国民教会」を目指す主流派とは明らかに異なる発想をもち、「教会契約」によってのみ結合しようとした。この契約は、個的主体性を確立した人格を前提としており、後に彼らの生み出した「メイフラワー契約」と呼ばれる新しい社会モデルは、この教会形成の実験体験をさらに社会形成の原理にしようとする点で新しい次元を開示していた。それは、国家を教会のモデルに従って契約的に形成しようとしていたからである。」

「オランダは、一五七九年にネーデルラント七州を合併して共和国を建設し、一五八一年七月にスペインから独立。オレンジ公ウイリアムがその元首となった。彼は、プロテスタントに基づく信仰の自由を保障する政策をとった。」

一六一〇

「貧困法」により「貧困税」を導入。

「この企画を形成した者は金持ちで、彼らは下層階級の人々が上層階級に上昇することを望まず、貧困者を雇用するよりも慈善を好みました。一般に三〇ポンド以上の年収者は貧困税を払い、年収三〇ポンド以下の者は貧困税から恩恵を受けます。……この経済的發展の国家的関心の責任母体は国・町の公的機関ではなく教区で、貧困者は法的に教区を離れて職を他の場所を探すことを許されませんでした。また地域に仕事がないことは問題となり、地域の人々は仕事場を創設し、貧困者の地域就職を支援する手段を求めました」(清水光雄著「民衆と歩んだウエスレー」教文館、四五頁)。

一六一一

欽定訳聖書刊行。ただしバンククロフトはこの企画に反対していた。

一六一八

三十年戦争(一六一八―一四八)。

一六二〇

ピルグリム・ファーザーズ、メイフラワー号で北アメリカに渡り、プリマス植民地を建設。

「彼らは、大主教アポットの温和なピューリタン政策のもとで、正式な移住許可証を手に入れて準備を進めていた。同乗者は

一〇四名で、ピューリタンはそのうち四一名。その数には、一〇名の女性と、一四名の子供も含まれていた。」
ジョン・ウエスレーの母スザンナの父サムエル・アンズリーが生まれる。

〔父(ジョン・アンズリー)は貴族であったが、サムエル・アンズリーは、一六六二年の「統一令」に従わなかったため司祭職を追われ、一六九六年、ロンドンの非国教会派の牧師としてその生涯を全うした。〕

〔サムエル・アンズリーはたしかに非国教会派の説教者であり、しかもその指導者の一人であった。しかし、彼は会衆主義者ではなかった。彼は穏健な長老主義者であって、国教会が長老主義教会になることを望んで、一六六二年までは内側にとどまり改革しようとしていたのである。なるほど彼はチャールズ一世に対して強い批判的態度をとったが、しかし王の死刑には激しく反対し、「その忌まわしい殺人」を憎みきらい、それを公言もしていた。このように考えてくると、スザンナの国教会への復帰は、表面的には父親のピューリタニズムへの裏切りとみえても一概にそうとも言えなくなってくる……しかし……彼女が国教会のなかでも高教会主義の臣従拒誓者の立場に、徐々にではあっても近づいていったことを覚えなければならない(野呂、前掲書、六八頁以下)。

一六二五

チャールズ一世即位(位一六二五-一四九)。

〔王の専制政治に対し、議会は「権利の誓願」(一六二八)をもつて抵抗。これに対し王は、カンタベリ大主教ロード(一五七三-一六四五)を重用して教会と国家の結びつきを強化し、長老派の強いスコットランドに国教を強制。その結果、内乱(王党派対議会派)が起き、結局オリヴァー・クロムウェル(一五九一-一六五八)の率いる軍隊に破れる。クロムウェルは独立派の中心人物で、長老派と水平派を抑えて独裁政権を組織し、最終的に護国卿となった(位一六五三-一五八)〕。

〔ピューリタン…宗教改革の不徹底性からイングランド国教会に

残存したカトリック的な要素を除去して、「清らかな教会」に改革しようとした、十六-十七世紀のプロテスタントの総称。清教徒と訳す。国教会の内部に留まって改革しようとする非分離派と、その外に出て信者の自発的な組織を作ろうとする分離派に大別され、また教義においてはカルヴァン主義者が大半を占めたが、それに反対のものも存在した(『世界史小辞典』山川出版社)。

〔カンタベリの大主教ロードの流れを汲む高教会派にとつては、それ「主教制」はハキリスト教にとつて必要不可欠な本質的なものVであった。高教会派の人々の主教制の考え方には、彼らが聖餐式におけるキリストの臨在を考える時と全く同じものが見られる。つまり八葉水の如き神の恵みは、使徒たちから今日の主教たちに中断することなく続く管を通ってくるものV……(野呂、前掲書、四〇頁、「使徒継承」)。

チャールズ一世の無議会政治(一四〇)。

ジョン・ロック誕生(一六三二-一七〇四)。
カンタベリ大主教ロードは、一六一八年にジェームズによつて発布された「遊びの書」を再公布し、日曜日の午後に開かれていた各種の「聖書講義の集会」を阻止しようとした。これに対しピューリタンは、十戒の第四戒に反するとして厳しく批判した。ジョン・ウエスレーの父方の祖父ジョン・ウエスレー誕生。

一六三六

〔祖父はオックスフォード大学で学び、最初、非国教会派の巡回伝道者として説教したが、ある国教会の教会員たちの希望により、按手札を受けずに、国教会の司祭となる。しかしその後、この国教会を去り、非国教会の伝道者として生涯を全うし、三四歳の若さで一六七〇年に死亡。そのとき、ジョン・ウエスレーの父サムエルは八歳であった。〕

一六三七

チャールズ一世が「ロードの祈祷書」(アングリカン様式の「祈祷書」)をプレスビテリアニズムの国スコットランドに強制した結果、エディンバラを中心に騒憂が起き、抵抗運動が広がった。

二月二十八日、「国民契約」(ロード政策に対し、プレスビテリアニズムを守るという国民的反対運動の宗教的表明)の成立。

〔年末に、スコットランドの教会総会は、ジェームズ一世によってスコットランドに強制されて以来、受容し続けてきた主教制度を廃棄することを決議。これに対しチャールズは軍を派遣し、スコットランドの反乱を鎮圧しようとしたが(第一次主教戦争)、国王側の敗北に終る。そこで戦費調達のために、王は十一年ぶりに議会を招集(一六四〇)。ところがその課税案は議会によって拒否され、この議会を三週間で解散(短期議会)。そして王は再び、スコットランドの反乱を武力で抑えようとするが(第二次主教戦争)、またも破れ、戦後処理のために議会を招集(長期議会…一六四〇年一月三日)。これが革命議会となった。〕

短期議会が解散されたとき、通常、それと同時に解散されるはずの「聖職者議会」が継続され、新しく一七条の教会法規が公布される。

〔その内容は、「国王神権説」と「受動的服従の倫理」という、過去百年間のアングリカン体制の支柱となった二大原理を再確認するものであった。したがって真に革命的な理念とは、この二つの原理を克服するような理念である。この革命的理念を明言した人物のひとつが、コモン・ローヤーのヘンリー・パーカーである。神学者でも牧師でもない彼が、「人間の墮罪と、人間とサタンの永遠的闘争というピューリタンの神話」を用いて、自衛権と抵抗権を主張した。そしてもうひとつが、ピューリタン牧師でありながら例外的にアルミニウス主義者であったジョン・グッドウィンである。彼は新約聖書の「第一ペテロ、二章一三節」に基づいて政治的権威と政治的制度を区別し、王制や貴族制を、民主主義と並ぶ人間的制度とみなした。〕

五名の議員を逮捕しようとして失敗した国王は、北部のヨークに逃れ、イギリスは内乱状態に入る。初めは王党派が優勢であったが、議会は、独立派のクロムウェルの指揮のもとに巻き返

しをはかり、一六四五年のネイズビーの戦いで、最終的な勝利を収める。

ロード、断頭台で処刑される。同時に、星室裁判所と高等宗務官裁判所も廃止される。

十月二十八日十一月十一日、パトニー会議(革命軍内部の一つの会議)。

〔A・D・リンゼイ卿は、この会議のなかに近代デモクラシーの源流がある」とみた〕(『ピューリタン』一五〇頁)。

〔この会議は、革命軍において「平和回復について議会に提出する議案」の内容に関し意見を調整するために開かれた。特に、「普通人権と自由に基づきたる確固適切なる平和のための人民協約」について議論が交わされ、そのなかで、レヴェラーによって代表される「人権の意識・理念」が確認された。また、ミルトンやクロムウェルによって主張された「寛容の精神」、つまり神の超絶性を前提として、人間の自己絶対化を否定する精神が主張された。後者は、合意に至る過程の議論の重要性を重視している。〕

〔この文書(「人民協約」)は、四つの大きな改革を含んでいる。第一は選挙民の数に応じた選挙区の平等化、第二と第三は現在の議会(長期議会)の解散と、二年ごとの議会解散、第四は議会自体が専制化しないための保障、つまり宗教の自由、強制兵役の拒否、内乱中の言動の免責、法律適用の平等、法律の改善などである。「人民協約」の歴史的意義は、人民主権を原理とした近代民主主義憲法の原型であるということである。この文書に内在する契約的原理は、思想的にみればあのメイフラワー契約の線に沿ったものであり、その発展であると言えよう(同、一五二頁)。

〔あの中世社会の岩塊がこわれて、人間が個人として立像のようになつて行かざるを得ない過程で、岩塊の中にあつた自然法は、個人の中に「自然権」Vとして転換されて人間主体の中に移行し、それによって近代的人権意識が成立したのである。レヴェ

一六四八

一六四九

一六五〇

一六五三

一六五八

一六六〇

一六六二

一六六三

一六六九

一六八三

ラーは、この革命がこの方向に動いていること、行くべきであることを自覚していた。そしてその近代的人権の基礎に立って英国を新しい契約社会へと形成しよう考えたのである」（同、一六一頁）。

第二次内戦。

一月十五日、軍評議会によって正式に、新しい「人民協約」が作成される。

一月三十日、チャールズ二世を処刑。

五月十九日、共和国成立。

クロムウェル、護国卿となる。

クロムウェル死去。

チャールズ二世即位（一六六〇―一八五）。

「国王はフランスと通じてカトリックと絶対王政の復活をはかったが、議会は革命の成果をいかし、国教主義に基づいて政治を進めようとした。この過程で、王権に寛容なトーリー派と、どちらかと言えば批判的なホイッグ派が誕生。」

チャールズ二世による第三次「統一令」が発令され、同意しない者は祭司職から追放された。

「スザンナの父サムウエル・アンズリーも、このとき国教会から追放された。」

二月十七日 スザンナの夫サムエル（二六六―一七三五）、幼児洗礼を受ける。

「サムエルは二歳するとき、「自分の家族や自分の抱いてきた信仰が誤りであったことを理解し、……一六八三年八月のある朝、……オックスフォードに向かった」（野呂、前掲書、五六頁）。

彼が司祭の按手礼を受けたのは一七〇九年。その際、国王への無条件的服従を要求する説教を行い、当時のホイッグ党の政府と非国教主義者たちを激しく攻撃した。」

一月二〇日 母スザンナ・ウェスレー（Susanna Wesley 一六六九―一七四二）誕生。

スザンナ、国教会へ復帰。

一六八五

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

一六八八

「ピューリタニズムと理性主義とは必ずしも相反しない……スザンナの理性は、そのまま息子ジョンの神学に見られる理性尊重である」（野呂、前掲書、六六頁以下）。

「しかもスザンナによると、理性の能力には限界があり、理性によって、受肉、贖罪、靈魂の不滅、最後の審判、三位一体、そして神の摂理といったキリスト教の基本的教理を捉えることは不可能である。神の本性・意志・目的は神秘的なものであり、それらは聖霊の照明によってのみ理解されるものである。」

ジェームズ二世即位（一八八）。

ジェームズ二世は、専制的で、カトリックの復活を意図しているとの疑惑により、議会からフランスに追放される。代わって王女メアリー二世（位一六八八―一六九四）と、その夫でオランダの総督ウィレムがウィリアム三世（一六八八―一七〇二）として招かれる。

「その結果、流血の惨事を伴わずに絶対王政が消滅し、議会が主権を握る立憲王政が確立される（名誉革命）」。

「臣従拒否者は、王権は神から与えられたものであると主張し、既存の権威に対する無抵抗を説いた。……ジェームズ二世を追い出したことは神の意志を無視したこととなり、ウィリアム三世には臣従できないという」（野呂、前掲書、四四頁）。

「権利章典」の発布（「王は、その権限によって、議会の同意なしに、法の効力を停止したり、法の執行を停止したりする権力があるという主張は、違法である」）『詳説世界史研究』山川出版社、二七〇頁）。

「英国では、一六六〇年の王政復古以後、一六八九年に宗教寛容法が制定され、原則的な信仰の自由が確立されたのですが、国教徒と非国教徒の差別は残り、一連の非国教徒への迫害が存続し続けました。公職やオックスフォード・ケンブリッジへの大

学受験は、一八二八年まで、国教徒のみに限定されてきました」（『民衆と歩んだウェスレー』一二五頁）。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

父サムエル、スザンナ・アンズリーと結婚。

一六九〇	ウエスレー夫妻、サウス・オルムスビーの牧師館に住み始める。	
一六九四	メアリ二世死去。ウイリアム三世の単独統治(一七〇二)。	一七二六
一六九七	父サムエル、リンカーンシャーのエブワースの司祭館に住み始める。	
一七〇二	この年の初めごろ、「ウイリアム三世を王と認めない」とスザンナが主張して、夫婦のいさかいが起こる。このように、スザンナは臣従拒誓者であった。	一七二七
	アン女王即位(一四)。	
一七〇三	スザンナのミニスクールが始まる。	一七二八
	六月一七日 ジョン・ウエスレー、サムエルとスザンナの第十五子として誕生。	一七二九
一七〇七	スコットランドはイングランドに併合され、イギリスは大ブリテン王国となる。	
一七〇九	二月一八日 弟チャールズ・ウエスレー、第十八子として誕生。	
一七一	二月九日 エブワースの司祭館、火災にあう。しかしジョンは奇蹟的に助かる。	一七三〇
一七二一	この年の年末から翌年にかけて、牧師館における日曜の夕礼拝で、スザンナはメッセージを語る。	一七三二
一七二四	ドイツのハノーヴァー選帝侯がジョージ二世(一七一四―二七)として迎えられ、ハノーヴァー朝の成立(一七一四―一九一七)。	一七三三
一七二〇	一月二八日 チャーターハウス校に入学。	
一七二三	六月二四日 オックスフォード大学、クライスト・チャーチ・カレッジに入学。	
一七二四	アダム・スミス誕生(一七二三―九〇)。	
一七二五	文学士の学位を受ける。 聖職者になる決心をし、補祭に任命される。 「第一の神学的分水嶺：ジョンの内面に、ホーリネスへの情熱が芽生える」(W・J・エイブラハム著「はじめてのウエスレー」四七頁)	
	スザンナの娘ヘティの悲劇が始まる「大塚野百合著『スザンナ・」	
	ウエスレーものがたり」教文館、一四四頁以下を参照)。	
	リンカン・カレッジ「保守的なトリーパー色の強い大学」の特別研究員(John...年収三〇ポンド)に選ばれる(一七五二)。	
	一月 ギリシャ語の講師となる。	
	二月一四日 文学修士の学位を受ける。	
	八月二四日 父の執事として働くために、オックスフォードを去る。	
	一月 弟チャールズ、オックスフォードで「神聖クラブ」を創始。	
	九月一八日 司祭の按手礼を受ける。	
	オックスフォード大学に戻り、テューターの役割を引き受け、また「神聖クラブ」の指導をするようになる。	
	「その後、会員はメソジストというあだ名で呼ばれるようになる。つまりそれは、ウエスレーたちの敬虔活動(聖餐式への積極的参加)と社会活動(刑務所訪問、孤児への教育、高齢者・病人・貧困者への配慮)に対して学生がつけたあだ名である。」	
	モルガンの勧めで、オックスフォード刑務所とポツカルドー刑務所を訪問。	
	オックスフォード大学の学生集団による「貧困者支援の会」を企画。	
	教父研究者であるクレイトンが「神聖クラブ」に入会。	
	「クレイトンは、初代教会の生活と信仰の意義、水曜と金曜の正しい断食方法(午後の三時まで何も食べない)、「祈り」の収集、さらに貧困者の支援方法などを教示。彼は、マンチェスターの本屋の息子であったため、ウエスレーに出版関係者、書籍販売人、さらに「キリスト教知識普及協会」を紹介。この協会は一六九八年に設立され、貧困者を教育し、囚人を訪問することを主な活動としていた。またそれは「敬虔な書物と教理問答」も提供していた。」	
	ジョージアの建設により、北米の東海岸に十三のイギリス植民地が成立。	

「どこから来て、どこへ行くのか——ジョン・ウエスレー(一七〇三―九一)の場合——」(I)

一七三三	「一七三三―三三八 前期」(清水光雄著)『メソジストって、何ですか』 教文館	一七三三
一七三四	最初の祈禱集『日々の祈りの諸形態』を出版。	一七三四
一七三五	ジョージ・ホイットフィールドが、「神聖クラブ」の会員となる。 トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』を翻訳し、出版。	一七三五
	四月二十五日 父サムエル、七二歳で死去。	
	一〇月二二日 宣教師として、弟チャールズらと共に、アメリカ のジョージアに向けて出発。	
	二月五日 サヴァンナに到着し、翌日、上陸。	
	八月二二日 弟チャールズ、アメリカを去る。	
一七三七	八月 ウィリアムソン夫人への陪餐を停止。	一七三七
	一二月二日 サヴァンナを去る。	
一七三八	「一七三八―六五 中期」(清水)	一七三八
	「第二」の神学的分水嶺…アルダスゲイト体験、信仰義認の教理を 再発見」(W・J・エイブラハム)	
	二月一日 デイールに上陸。	
	二月七日 ベーター・ペラーと出会う。	一七四〇
	五月一日 フェター・レインの会に入会。	
	五月二二日 弟チャールズ、福音的回心を体験。	
	五月二四日 ジョンの回心体験。	一七四一
	六月一三日 モラビア派の人たちを訪ねるために、ドイツに向か う。	一七四二
	九月一六日 ロンドンに帰る。	
一七三九	三月 「世界は我が教区である」と確信。	一七四三
	四月二日 ブリストルの炭鉱町で野外説教を始める。会衆の数は 約三、〇〇〇人。	
	「貧困者に、食物、服、住居、医薬、その他の必需品を調達。会 員相互の信仰的成長と支援体制の強化のために班会や組会を組 織。そのモデルとなったのはモラビア派の組織形態。」	
	「ウエスレーは、通例、朝四時に起床し、五時に仕事に行く前の人々 に説教をします。説教者も同様です」(『民衆と歩んだウエス レー』三六頁)。	
	「ウエスレーは貧困者の伝道者・神学者であった」(同、九六頁)。	
	六月 ブリストルから三マイル離れた炭坑町キングスウッドに学 校(男子専用の初等教育部門)を設立。	
	「この学校の礎石はホイットフィールドによって据えられたため、 後にウエスレーとホイットフィールドの間で、学校の所有権を めぐって争いが生ずる。」	
	「ウエスレーが目指した教育の礎は、知識と経験、知恵と愛、教 育と実践という二重性にありました。神と隣人を愛することが 人間の存在目的で、これを実現することこそが教育の目的でし た」(『民衆と歩んだウエスレー』一三二頁)。	
	九月 ロンドンの主教バトラーによって、主教管区での説教を拒 否される。	
	一月六日 スザンナの長男サムエル、四九歳で死去。	
	二月 スザンナ、ロンドンのメソジスト本部(ファウンダリー) にジョンと一緒に住む。	
	六月二〇日 フェター・レインの会を離脱。	
	スザンナ、回心を経験(大塚野百合、前掲書、二〇四頁以下を参 照)。	
	九月三日 グレーズ・インでツインツェンドルフと会談。	
	六月六日 父サムエルの墓の上で説教。	
	七月三〇日 母スザンナ、七三歳で死去。	
	「メソジストの性格」について語る。	
	「選ばれた会」の創設。この会の中心的リーダーとなったのがマー チ婦人。	
	「メソジストが初代教会復興のパイオニアになることを期待した ウエスレーは、聖化・完全を体験したい人々のために、 一七四三年にロンドンで、選別された会を特別に創設しました。 この会の創設は、初代教会に関心をもつ国教会と、ベンテコス テの教会親の影響にあります。彼によれば、ベンテコステ時代の 教会は聖霊の働きにあまりにも開放的・応答的であったので、	

<p>彼らは全員、直ちに心と生活の全き聖化へと変容されました。この変容の主たる姿は会員相互の愛に見られ、持ち物の共有が始まり、具体的な隣人愛の奉仕へと導かれました。ウエスレーのこの共同体は、週一回、彼と話し合い、完全なる愛を求める集いで、特に強調されたのが余剰のお金を持参することです。この「共通の蓄え」が聖化された者の交わりの本質を現す根源の規定でした。ウエスレーにとって、この会の形成は、持ち物を共有する聖書の理想に戻るために、自発的に貧困者と資源を共有することでした。しかし選別された会場でさえ、非常に僅かな人しかこの理想に関係しないことに、彼は戸惑いました」（『民衆と歩んだウエスレー』九九頁以下）。</p>	<p>らの霊的健康ならびに肉体的健康のためと捉えましたが、この霊性と肉体を伝道の対象「とすること」は、英国ではごく一般的なことでした。その意味で、彼が無料診療所を開き、『根源的治療法』を出版し、電気器具の設計、六編の医学論文を書いたこともうなずけます」（『民衆と歩んだウエスレー』一四一頁）。貧困者の小ビジネスを助ける無料子ローンを企画。</p>
<p>「メソジスト会の貧困者支援と同様に、選ばれた会でもわずかな人しか自由なる病人訪問の活動に参加せず、ウエスレーの深い悲しみはますます明確になったのでした」（同、一二〇頁）。</p>	<p>「四半期会」を結成させる。この会には班会・組会の指導者や執事も参加した。</p>
<p>「しかし、どのような状況にあっても、彼は初代教会の相互扶助体制を捨てませんでした。一七八三年の説教「福音の一般的普及」において、彼は財産を共有する新しいペンテコステの出現を期待しました」（同、一〇三頁）。</p>	<p>「一七五〇年代以降のメソジスト集団では、平均年収以上の者とそれ以下の割合は二対三でした。……メソジストの全員が参加する組会で貧富の亀裂を起させないために、ウエスレーは病人訪問チームを組織しました」（『民衆と歩んだウエスレー』四四頁以下）。</p>
<p>メソジスト会の第一回年会が開かれる。</p>	<p>二月一六日 マリーと結婚。</p>
<p>八月二四日 オックスフォードでの最後の説教。</p>	<p>四月 スコットランドでの最初の伝道。</p>
<p>英国で初めての公共無料診療所を開設。</p>	<p>五月 リーズでの年会において、メソジスト会は国教会から分離すべきかどうかということが論じられ、最終的に分離しないことが決定される。</p>
<p>弟チャールズが責任者となって、説教者の資格調査が始められる。</p>	<p>この頃より、妻との不和が表面化。</p>
<p>八月九日 最初のアイルランド伝道。</p>	<p>『「第三の神学的分水嶺…ウエスレーは自分の考える真の宗教の真髓を提示。ウエスレー神学の全体像を理解するための基本資料」』（W・J・エイブラハム）</p>
<p>『根源的治療法』「自然治癒書」を出版。この書物は一八四七年頃まで重版され、その後、フランス語版も出版される。</p>	<p>『「説教集」と『新約聖書略註』をメソジスト説教者にとつての公式の教理的標準と定めた』（W・J・エイブラハム、前掲書、三二頁）。</p>
<p>「十七世紀の国教会では、司祭候補者に対して、基本的な薬学研究を教育指導の一部として行っていました。特に、小さな村での司祭は最も教育ある人格者で、伝道の一部として薬学治療を行つたのです。ウエスレーの伯父も司祭で同時に医者でした。……基本的な医学研究は十七世紀の国教会司祭候補者に対する指導の一部だったのです。ウエスレーは、メソジスト伝道を彼</p>	<p>一七五〇</p>
<p>一七四四</p>	<p>一七五九</p>
<p>一七四六</p>	<p>一七五五</p>
<p>一七四七</p>	<p>一七五七</p>

「どこから来て、どこへ行くのか——ジョン・ウエスレー（一七〇三—一七九一）の場合——」（I）

一七六五	「一七六五―九一 後期」(清水)		
	巡回説教の移動手段の変更(馬→二輪馬車)。		
一七六六	『キリスト者の完全』を出版。	一七八三	一〇月八日 ジョンの妻、別居状態のままに死去。
一七六七	北アメリカのニューヨークに最初のメソジスト教会が建設される。	一七八四	六月 オランダ訪問。
一七六九	ワット(一七三六―一八一九)、蒸気機関の改良に成功。		二月二八 メソジスト会の憲法が制定される。
一七七〇	「第四の神学的分水嶺」年会議事録の出版。この文書のなかで、ウェスレーはカルヴァン派からの批判に明快に应答。カルヴァン派の予定論を否定(W・J・エイブラハム)		九月初め アメリカのメソジスト教会のために、コーク博士らに按手札を授け、コークを監督として派遣。
一七七一	九月三〇日 ジョージ・ホイットフィールド死去。 マリイ夫人、ウェスレーの許を去る。 「特別な」という条件をつけ加えた上で(したがって按手札を女性に認めなかったが)、パウロの禁止を解除し(「Iコリ一四・三四」、合計二七名の女性説教者を承認した)。「ウェスレーの救済論」(八六頁)。なお、「英国で初めて司祭に女性が登用されたのは一九九四年のことでした」(『民衆と歩んだウェスレー』一一頁)。	一七八七	「第五の神学的分水嶺」北米の新しい教会を守るためのウェスレーの重大な決断」(W・J・エイブラハム)
一七七三	七月一四―一六日 アメリカのフィラデルフィアで、第一回メソジスト年会が開催される。	一七八八	「サラ・マレーをメソジストの女性説教者第一号として正式に任命した」(W・J・エイブラハム、前掲書、三二六頁)。
一七七五	ペーター・ペーラー死去。	一七八九	三月二九日 弟チャールズ、八〇歳で死去。
一七七六	七月四日 アメリカの独立宣言。	一七九〇	一〇月六日 ウィンチェルシーで最後の野外説教。
一七七七	四月二一日 ロンドンのシテイー・ロード・チャペルの定礎。これはやがてメソジスト運動の本部となる。	一七九一	二月二二日 シテイー・ロード・チャペルで最後の説教。
一七七八	一月一日 『アルミニアン・マガジン』を創刊。		二月二四日 ウィリアム・ウィルバーフォースに最後の手紙を書き送り、奴隷解放運動を激励。
一七八一	一月一日 シテイー・ロード・チャペルの献堂式。 カント(一七二四―一八〇四)、『純粹理性批判』を出版。 説教「全被造物の解放」。「動物も人間の知性・意志のレベルへとあらゆる段階を通じて高められる」(『ウェスレーの救済論』八三頁)。 「社会・全被造物の変容をも含めた、成長・発展を通して」の「の」讀みの完成という宇宙的視点からの終末論」(同、八〇頁)。	一七九三	三月二日 午前一〇時、シテイー・ロードにおいて、ジョン・ウェスレー、八七歳で死去。
			モーツァルト死去(一七五六生まれ)。 英国のメソジストが国教会から分離・独立。